

デンマークの国民学校におけるペダゴグ(Pædagog)の役割

山浦 祐香 高知大学教職大学院
 是永 かな子 高知大学教育研究部人文社会科学系教育学部門
 /高知ギルバーク発達神経精神医学センター

要 旨：本研究では、社会教育や生活支援の専門性を有し、教育・福祉関係機関に勤務する、ペダゴグの国民学校における役割を明らかにすることを目的とした。結果は以下である。第一に、国民学校におけるペダゴグの専門性は教員と協働して学級経営を行うことであり、ペダゴグは社会性支援の視点から子どもにかかわり、集中的な早期個別支援を行っていた。第二に、ペダゴグと教員の役割分担は教員が基礎教科を主に指導し、ペダゴグは実技教科や特別活動を主に指導していた。また特別学級でペダゴグはソーシャルスキルの指導も担当していた。第三に、移行支援としてペダゴグは、就学前教育機関終了から国民学校入学まで移行期間に学童保育において子どもの実態把握を行っていた。同時に国民学校における学級編制を検討するなど、就学準備活動を担っていた。国民学校就学後は学校の授業から放課後の学童保育まで指導を行い、子どもの連続した成長や学びを支援していた。

Key Words：デンマーク、ペダゴグ、国民学校

● 1. はじめに

デンマークにおける就学前教育は、生後 16 週から 3 歳までの保育所と 3 歳から 6 歳までの幼稚園に分けられる。それらの管轄は ECEC(Early Childhood Education and Care)として統一されており、義務制ではないが多くの子どもが就学前教育機関を利用する。そして 9 年制義務教育学校の国民学校(Folkeskole, 以下、国民学校)に加え、2009 年から 0 年生としての就学前学級が義務化されている。就学前学級では、主として保育士資格や生活指導員資格を意味するペダゴグ(Pædagog)が指導を担当し、国民学校教員も指導に参加する。

ここでペダゴグ(Pædagog)について確認する。ペダゴグ(Pædagog)は社会教育(Social education)の学位を取得する。社会的観点(Social perspective)から、保育所や幼稚園、デイケアセンター、就学前学級、余暇施設、学童保育、児童福祉施設で子どもや若者を支援し、依存症や精神疾患、ホームレスなどの社会的問題のある成人の支援にもかかわり、家族を対象にした施設や子どもや若者を対象とした精神病院でも勤務する。加えて犯罪予防活動や刑務所や保護観察所内

で働くための資格とも認定される。3 年半課程で 210 単位(ECTS credits)の内、共通科目は 70 単位、140 単位は専門科目から履修内容を選択する。2019 年時点でペダゴグ養成プログラムは全国 6 校のユニバーシティカレッジ(University colleges)で履修できる⁷⁾。

ペダゴグ(Pædagog)の養成は 100 年以上の歴史がある。7 歳児を対象とした施設は 1820 年にコペンハーゲンに開設された。20 世紀になるまでに 100 以上の施設が開設され、それぞれ 100 人から 200 人の子どもに対応していた。当時は職員に対する養成課程はなかった。その後ドイツのフレーベルの影響を受けつつ、最初の幼稚園が 1871 年に開設された。1885 年に幼稚園の教職員に対する教育が開始され、1904 年には教職員養成のための教育機関(Fröbel-Seminariet)が開設された。1906 年にはフレーベル国民高等学校(Fröbel-Højskolen)において 1 年の養成課程が設置され、1910 年には管理職となるための 1 年半の養成課程も開設された。1918 年には指導者も管理職も 2 年の養成課程となった⁸⁾。1928 年にはモンテッソーリ学級(Montessori-class)も開設され、2 年間の幼児教育教員養成コースが開設された⁹⁾。そして 1992 年 9 月から従前の複雑な養成課程を統合し、

ペダゴグ(Pædagog)として3年半の養成課程を開始した。近年では2001年から養成課程の学士号導入改革着手、2004年の養成課程内容の明示、2007年のペダゴグIPS(Initial professional studies)改革を経て、2014年に現在の養成課程の基礎が築かれた⁵⁾。

デンマークの就学前教育では、子どもが遊びを通して学ぶことを重視しており、子どもが空想や創造、身体活動に没頭することを大切にしている。そのためにペダゴグ(Pædagog)は子どもの興味を尊重すること、子どもと大人の関係が対話によって形成されること目指している⁴⁾。就学前学級においても、可能な限り遊びや子どもの発達に即した活動を用い¹³⁾、遊びながら学習準備を行う。

さて本稿では、専門職としてのペダゴグ(Pædagog)に注目する。以前ペダゴグ(Pædagog)は主に学童保育(SFO, skolefritidsordning)に勤務していたが、1997年の教育省、自治体連合、教員組合による「国民学校2000(Folkeskolen år 2000)」プロジェクトによって学校教員との協力が推進された。学童保育担当ペダゴグ(Pædagog)のみならず、就学前学級担当ペダゴグ(Pædagog)や低学年担当教員が学校の授業を含む様々な活動において、より積極的に協力し合うことになったのである¹⁴⁾。2014年の国民学校改革(Folkeskolereformen)の過程でも、ペダゴグ(Pædagog)は子どもの国民学校就学支援などの新しい役割を与えられた。この役割は子どもの幸福度を増すことにもつながっているとの指摘もある⁸⁾。ペダゴグ(Pædagog)という指導者の存在は、就学前教育機関から学校への移行支援の観点においても示唆的であると考えられる。

デンマークの移行支援について、障害児は就学前教育機関で個別の計画に基づいた指導を受けている。また障害児支援には様々な専門機関や専門家、行政担当者がかかわっており、保護者と就学前教育機関のペダゴグ(Pædagog)、各専門家が個々の子どもにチームを編成して対応する。このことが障害児に対して質の高い保育・教育実践を行うことができる要因となっているとの指摘がある⁹⁾。

以上をふまえて本論文では、デンマークの国民学校におけるペダゴグ(Pædagog)の役割と就学前教育機関と学校間の移行支援について考察することを目的とする。ちなみに日本では小学校教員が学級経営と生活指導、学習指導を担当として一任されて、多忙を極めている。近年特別支援教育支援員などが導入されているが、

支援員としての資格は不問であり、子ども支援として時給で雇用されているため、その職の安定性や研修会への参加の保障は十分ではない。就学前教育と学校教育をはじめとした幅広い分野において社会教育や生活支援の専門的観点から介入するペダゴグ(Pædagog)の有用性について、本稿では検討したいと考える。

● ————— II. 方法

本研究では、学校の実態に関する観察調査とペダゴグ(Pædagog)・教員等へのインタビュー調査、加えて文献検討を行った。分析する自治体は首都コペンハーゲンを含む Hovedstaden レギオン(Region, 地域の意味、デンマーク内には5つのRegionがある)に位置し、2007年の自治体改革において統合を行わなかった Brøndby 自治体とした。Brøndby 自治体の2018年の人口は35,538人、面積は20,85km²である。Brøndby 自治体はコペンハーゲンの郊外にあり、Brøndby Nord を含む Brøndbyøster, Brøndbyvester, Brøndby Strand の3地域で構成されている。

Brøndby 自治体で調査を行ったのは、Brøndbyøster 国民学校である。Brøndbyøster 国民学校は就学前学級4学級、1年生は通常学級4学級と自閉スペクトラム障害特別学級1学級、2年生は通常学級5学級と言語聴覚障害特別学級1学級、3年生は通常学級4学級と自閉スペクトラム障害特別学級1学級、4年生は通常学級4学級と自閉スペクトラム障害特別学級1学級、5年生は通常学級5学級、6年生は通常学級4学級と自閉スペクトラム障害特別学級1学級、7年生は通常学級4学級と自閉スペクトラム障害特別学級1学級、8年生は通常学級4学級と知的障害特別学級1学級、自閉スペクトラム障害特別学級1学級、9年生は通常学級4学級と自閉スペクトラム障害特別学級1学級であった。自閉スペクトラム障害特別学級について、子どもの総数は54人、教職員は教員17人とペダゴグ(Pædagog)8人であった。

学校の実態に関する観察調査では、子ども数と教職員数、日々のスケジュール、活動の様子や特色の観点で、就学前学級(2019年2月7日)と1年生学級(2019年2月4日)それぞれ1学級、自閉スペクトラム障害特別学級(2019年1月14日から3月28日の期間の内、定期的な28日間訪問)は2学級において行った。

観察した就学前学級は子ども数 22 人，担任はペダゴグ(Pædagog)2 人であった。1 年生学級は子ども数 22 人，担任は教員 2 人とペダゴグ(Pædagog)1 人，午前中のみのアシスタントとしてのペダゴグ(Pædagog)が 1 人であった。特別学級は 1 年と 3 年を訪問した。1 年の特別学級は，子どもは 8 人，教員 3 人とペダゴグ(Pædagog)2 人，3 年の特別学級は，子どもは 11 人，教員 2 人とペダゴグ(Pædagog)3 人であった。教員の内 2 人は 1 年と 3 年双方を指導するが，主に指導する学級に教員数を計上した。

聞き取り調査項目は全ての訪問学級の共通項目として設定し，学級を担当しているペダゴグ(Pædagog)または教員それぞれの立場で回答してもらった。共通聞き取り項目は，1: ペダゴグ(Pædagog)または教員が大事にしていることは何か，2: ペダゴグ(Pædagog)または教員の専門性は何であると考えるか，授業の中で工夫している事は何か，3: 配慮の必要な子どもへのアプローチの仕方や個別の支援計画・指導計画の作成方法について，4: 就学時の引継ぎの制度や仕組みについて，である。

また聞き取り調査時に提供された資料及び自治体公刊資料，自治体公式 Web サイトの情報等も検討した。写真撮影の際には随時撮影の許諾を得た。倫理的配慮に関しては，聞き取りを実施した研究協力者と学校に対して，論文投稿を含めた研究の目的と聞き取り調査の意図，質問項目を英語の文書で提示し，了承を得られた項目のみを回答してもらった。

地方分権が進むデンマークでは各地方自治体のみならず各教育機関によって実践が多様に展開している。そのため，文献研究のみならず，現地調査として個別事例を検討することに

よって，ペダゴグ(Pædagog)という専門職の実像の一端を明らかにする。

III. 結果

1. Brøndbyøster 国民学校就学前学級

(1) 就学前学級の訪問調査結果

訪問日の日程は以下である。8 時から子ども各自が読書を始め，後にペダゴグ(Pædagog)が子ども全員に対して読み聞かせを行う。8 時 30 分からダンス，その後デンマーク語の学習，そしておやつであった。10 時 30 分から約 30 分の休み時間があり，日付の確認，算数の学習，図書館へ行って本を借りる活動，11 時 20 分に昼食の時間，であった。12 時 40 分から読み聞かせと絵を描く活動，絵を描き終わった子どもは 13 時 30 分から自由遊びの時間，14 時に下校・学童保育に移動，となっていた。

教科としては，主に算数とデンマーク語，他には体育と音楽を指導していた。Brøndby 自治体が読書活動を推進していることもあり，図書館の時間設定があった。またペンを持って書くことに慣れる練習も意図的に組み込んでいた。

就学前学級には，2019 年 2 月現在 6 歳と 7 歳の子どもが在籍していた。訪問した学級を指導する教職員は 2 人ともペダゴグ(Pædagog)であったが，教員とペダゴグ(Pædagog)が指導者である学級もある。訪問学級の特徴として，担当ペダゴグ(Pædagog)が以前言語障害特別学級に勤務していたこともあり，読書を重視していたことがあげられる。2018 年 8 月から 2019 年 2 月までで本を 103 冊読んでいるとのことであった(写真 1)。4 グループに机が配置されてお



写真 1 教室の様子
(黒板の上にこれまで読んだ本の表紙が掲示されている)

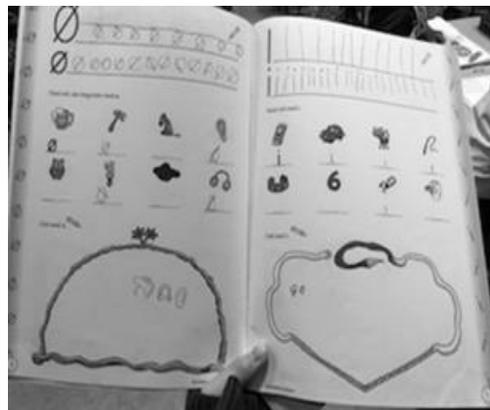


写真 2 デンマーク語のテキスト

り、毎週月曜日にグループメンバーを変更する。おやつやノートの配布は子どもが当番制で行い、当番の担当も子ども同士で決める。けんかせずに当番の話し合いを行うことで、コミュニケーション能力が育っているとのことであった。2人のペダゴグ(Pædagog)のうち副指導のペダゴグ(Pædagog)の役割は、騒がしくなった時の注意喚起や困っている子どもの個別支援などであった。

ダンスなどの体を動かす活動は、毎朝取り組んでいる。学校生活が始まると、就学前学級であっても子どもは8時から14時という長時間学校にいることになるため、体を動かす活動は欠かせない。同時に1年生で困らないように「椅子に座る」ことも指導する、とのことである。訪問日のデンマーク語の学習は、「S」と「M」の発音の確認や「S」と「M」から始まる単語を学ぶ内容であった(写真2)。算数の学習では教科書があり、動物の足の数を数える20までの数唱の内容であった。主指導ペダゴグ(Pædagog)による学習支援としては、どこの問題を解いているのかわからない子どもに対して、今解いている問題以外を見えないようにするなど集中できる環境設定を行っていた。算数の学習の後半は、グループで数カードを順番に並べる活動であった。自分が並べる数を持っていないときも、指導者は「パス」を言うように促していた。

新学期が始まる8月から約2か月は子どもが学校に慣れること自体が困難であり、クリスマス頃に学校とはどのようなところなのかがわかってくる、とのことであった。

(2) 就学前学級のペダゴグ(Pædagog)に対する聞き取り調査結果

就学前学級のペダゴグ(Pædagog)の回答は以下であった。「ペダゴグ(Pædagog)が大事にしていることは何か」という質問に対しては、明確に伝えること、どうやって子どもが学んでいるか理解すること、毎日全員に声をかけて様子を知ること、子どもがどう感じているかを考えること、毎日楽しくすること、学校は楽しいところと思ってもらうこと、教室や学校を居心地の良い場所にする、学校という場を教えることなどを意識している、とのことだった。

「ペダゴグ(Pædagog)の専門性は何であると考えるか」という質問には、お互いを尊重し合ったり、相手の話をよく聞いたり、どう振舞うかについて教えること、心理的な知識やどのように子どもが成長し発達していくかについて知っていることなどであり、ペダゴグ

(Pædagog)は心理を学び、子どもの心理面を指導している、とのことだった。

「配慮の必要な子どもへのアプローチの仕方や個別の支援計画・指導計画の書き方について」という質問には、進級に関して一年就学を猶予した方がいいなどの助言を保護者に伝えることもある、とのことだった。

「就学時の引継ぎの制度や仕組みについて」は、就学前学級と学童保育での指導を担い、「就学児担当チーム」の一員でもある担任ペダゴグ(Pædagog)から以下の回答を得た。ペダゴグ(Pædagog)は学校と学童保育両方の子どもの姿を見られたり、保護者と話したりする機会があることが強みである。また子どもは就学前教育機関終了から国民学校就学前学級入学までの間学童保育に来るため、就学前に子どもの実態把握ができる。「就学児担当チーム」は1月もしくは2月に就学前教育機関において聞き取りを行い、3月は家族や生育歴、交友関係などの情報を参考に約2週間かけて次年度の学級編成をしている、とのことであった。

(3) 就学前学級の訪問調査考察

就学前学級は、主に1年への移行準備として学校を理解する期間にあてられていた。字の書き方や数も学習するが、長時間の学校滞在や着席に慣れること、グループ活動などのコミュニケーションやソーシャルトレーニングに重点を置いていた。

就学前教育機関と国民学校1年の中間の就学前学級において、子どもに遊びと学びが統合された環境を設定することは創造性、選択、実行、内省などの機会を提供できることを意味する¹⁰⁾。就学前学級では、子どもの発達や人間関係形成、コミュニケーション能力に重点を置いており、ペダゴグ(Pædagog)は他者尊重や相手の話を聞くモデルとなること、子どもに適切な振る舞いを教えることによってそれらに寄与している。そして学童保育においてペダゴグ(Pædagog)は、就学前教育機関と学校の結節点となることや保護者との信頼関係を構築する役割を担っている。ペダゴグ(Pædagog)は子どもの連続的な成長を保障していると言えよう。

2. Brøndbyøster 国民学校1年生学級

(1) 1年生学級の訪問調査結果

訪問日の日程は以下である。8時から8時20分が学級活動(USU, Understøttende undervisning)、その後授業、9時40分から10時まで休み時間、10時から10時40分と10時40

分から 11 時 20 分までの 2 時間分の時間を用いてデンマーク語の授業が行われていた。11 時 20 分から昼食, 12 時 30 分から図工, 13 時 15 分から 14 時までデンマーク語であった。学級活動には, 学級全体の人間関係形成のための特別活動としての「USU」とゲームなども用いて教科学習を深める復習的内容としての「FF(Faglig fordybelse)」がある。学級活動「FF」はペダゴグ(Pædagog)が 1 人で指導していた。

算数ではペダゴグ(Pædagog)1 人と教員 1 人で授業を行っており, ペダゴグ(Pædagog)は副指導の役割を担っていた。診断はないが障害の疑いがある子どもが 3 人在籍していると教員が指摘しており, その内の 1 人は全時間通常学級で学習することが困難なため, 特別教室でも学ぶ。特別教室での抽出指導は 1 人約 20 分で, 教員やペダゴグ(Pædagog)が交代で指導する, とのことだった。特別教室には対象児全員の利用予定時間が黒板に記されていた。

教室内には, 棚で区切られたスペースもあった(写真 4)。算数の授業は, パソコンを使ったり, プリントを解答したりと個人学習であったが, 授業中に 1 人の子どもが棚で区切られたスペースに行き, ペダゴグ(Pædagog)と一緒に学習していた。ペダゴグ(Pædagog)は子どもが課題着手に戸惑っていたようなので支援をした, とのことであった。

また「学級のみながうるさいから」と頻繁に教室から出て行く子どももいた。ペダゴグ(Pædagog)はその子どもは集団での学習に馴染めなくて出て行ったと理解していた。

(2) 1 年生学級のペダゴグ(Pædagog)と教員
に対する聞き取り調査結果

「ペダゴグ(Pædagog)または教員が大事にし

ていることは何か」という質問に対しては, 担任教員が以下のように回答した。デンマークの社会の特徴として, 保護者は子どもに「今日は何が食べたい?何がしたい?」などの選択肢を多く与える傾向がある。そのため子どもがやりたいことだけやろうとしてしまったり, 「家でできるから」と言って学校で(課題を)やらなくなってしまうという印象を持っている。また移民も多く, この 1 年生学級にもパキスタンやトルコからの移民の子どもがいる。移民の保護者は, 子どもに困難があっても障害と認めないことも多い。移民への対応は多文化を理解できるという利点はあるが, 大変である。ペダゴグ(Pædagog)と教員の違いは, お互いに協働しているため明確ではない。あえて言うならば, 教員は基礎教科を教える。ペダゴグ(Pædagog)は美術, 音楽, 体育等の実技教科に特化して指導したり, 心理面の支援を行ったりする。就学前学級, 1 年生, 2 年生の各学級には教員の他, ペダゴグ(Pædagog)が 1 人配置されている。3 年生以上は必要に応じてペダゴグ(Pædagog)が配置される, とのことであった。

「ペダゴグ(Pædagog)または教員の専門性は何であるか」という質問に対しては, 担任ペダゴグ(Pædagog)から以下の回答を得た。自分自身はペダゴグ(Pædagog)として, 学校では午後からの勤務であり, 放課後は学童保育で勤務する。学校の勤務は 1 週間のうちに 8 時間分であって, 内 6 時間は副指導者として教員を支援し, 2 時間は主指導者として授業を行う。主指導授業は「学級活動」であり, 学級づくりの基礎としてゲームや活動を通して子どもを指導する, とのことであった。

「配慮の必要な子どもへのアプローチの仕



写真 3 1 年生学級の黒板とモニター



写真 4 教室の様子
(奥に区切られたスペースがある)

方や個別の支援計画・指導計画の書き方について」という質問に対しては、担任教員から以下の回答を得た。子どもの障害について、就学前教育機関も引き継ぎ文書を書くが、国民学校就学後に障害が顕在化することも多い。心理士からの情報を受け、教員、ペダゴグ(Pædagog)、心理士、特別支援専門の看護師、校長、保護者が参加する会議で支援方法を協議する。現在1年C組には3人障害の疑いがある子どもがいるが、心理士からの情報提供までであり、診断や会議開催まで至っていない、とのことであった。

(3) 1年生の訪問調査考察

指導において教員は基礎教科を主に担当し、ペダゴグ(Pædagog)は実技教科や学級づくりのような特別活動の授業を主に担当していた。またペダゴグ(Pædagog)は特別な教育的ニーズがある子どもへの支援や集団活動への参加を促すという役割も担っていた。

ペダゴグ(Pædagog)養成課程には「感覚科目」がある¹⁴⁾。ペダゴグ(Pædagog)の専門性の一つは子どもの「感覚を豊かにする」ことである。結果的にどの子どももより良く生活することを指導する役割がペダゴグ(Pædagog)の専門性の一つである。副指導者として学級を支えたり、主指導者として授業を担当したりとペダゴグ(Pædagog)の役割は幅が広いと考察した。

3. Brøndbyøster 国民学校特別学級

(1) 特別学級の訪問調査結果

1年の特別学級の日程は、1時間目が8時から9時、2時間目が9時から9時40分、休み時間が9時40分から10時、3時間目が10時から10時40分、4時間目が10時40分から11時20分、昼食が11時20分から11時45

分、休み時間が11時45分から12時30分、5時間目が12時30分から13時15分、6時間目が13時15分から14時であった。授業内容は、朝の会、球技などのスポーツを中心とした体育、英語、デンマーク語、算数、宗教、ソーシャルストーリーを使用したソーシャルスキルトレーニング、読み聞かせ、遊びの時間、自然、図工、ゲームをしながらルールなどを理解する社会性の授業、運動スキルトレーニングの活動などがあった。

教員は7時50分に勤務を開始する。子ども8人前後を教職員3人で担当する。他にも2学級を担当したり、時間によって入れ替わって指導したりする教職員もいる。教室には大きなスクリーンがあり(写真5)、日付や天気をその日の当番が調べて全員で確認していた。朝の会の時には当番が今日の予定を確認して(写真6)、全員が授業の流れを理解できるようにしていた。

朝の会の後は、ほとんどの日が体育であり、外で体を動かすか教室の中で軽いダンスをしていた。ペダゴグ(Pædagog)は個別の時間割を確認したり、一日の終わりには今日はどんな日だったかを子どもに聞きつつ、評価代わりの顔マークを貼ったりしながら、肯定的な振り返りを促していた。ハイタッチやハグなどの帰りのあいさつの仕方を一人ひとりに聞いて決めさせてもいた。タイムタイマーを活用するなど、TEACCHプログラムの指導もペダゴグ(Pædagog)が行っていた。活動の切り替えと着席の促し、個別指示やおやつや昼食が進まない子どもへの支援は教員とペダゴグ(Pædagog)両方が行っていた。

毎週金曜日の昼食時に45分程度教員とペダゴグ(Pædagog)が会議を行い、行事や学級および



写真5 教室内の大きなスクリーン



写真6 日程とタイムタイマー

個々の子どもについて情報共有を行う。ペダゴグ(Pædagog)だけが参加する会議では、特に放課後支援について協議する。また月に2回は学校全体の教職員の会議がある、とのことであった。

1年の特別学級の英語授業では、絵本を使った読み聞かせや教科書を使った「What is your name?」「My name is…」「I am…」等の内容を学んでいた。算数授業はiPadを使ったり、レゴブロックを使って数を数えたりする活動であった。

3年の特別学級の算数・デンマーク語は2グループに分かれて授業を行っていた。グループ内でもレベルに応じて小集団を編成する。算数担当教員1人とデンマーク語担当教員1人が学習指導を行っており、ペダゴグ(Pædagog)も指導に参加していた。算数やデンマーク語の授業では教員が主指導を担い、体育や運動の授業はペダゴグ(Pædagog)が主指導を担っていた。運動の授業では、歌いながらストレッチをしたり、「フルーツバスケット」のようなゲームをしたりして体をどのように動かすかを指導する。他にも後ろ向きで細い線の上を歩いたり、マークを目指して飛び移ったり、匍匐前進したり等、筋肉、腱などを意識して、体のいろいろな部分を動かす活動を行う、とのことであった。

(2) 特別学級のペダゴグ(Pædagog)および教員に対する聞き取り調査結果

「ペダゴグ(Pædagog)または教員が大事にしていることは何か」という質問に対しては、担任教員から以下の回答を得た。指示を明確に伝えること、準備をすること、20分単位で休憩を取ることの3つを心掛けている。具体例としては、何をこれから行うかを事前に伝えることや朝の会の際に日程を確認すること、子どもの指導計画を一年に一回更新することなどである、とのことであった。

「ペダゴグ(Pædagog)または教員の専門性は何であると考えるか」という質問に対しては担任ペダゴグ(Pædagog)から以下の回答を得た。ペダゴグ(Pædagog)の専門性は、社会的(Social)な部分を担っているということ、また家庭での子どもの様子を聞いたり、保護者とコミュニケーションをとったりすること。ペダゴグ(Pædagog)を養成する専門大学では障害に関する知識のみならず、着替えなどの日常生活指導、集団編成、感情のコントロール、子どもの発達について学ぶ。ペダゴグ(Pædagog)が指導できる教科は、体育・運動、音楽、演劇、特別支援である、とのことであった。

「配慮の必要な子どもへのアプローチの仕方や個別の支援計画・指導計画の書き方につい

て」という質問に対しては、担任教員から以下の回答を得た。障害児と診断された子どものみ個別の資料がある。障害自体についての情報は医師から提供される。特別学級では学習と日常生活の状況についての協議の場が年に1回、11月に設けられる。その際に翌年も特別学級に在籍する必要があるかなども検討される。特別学級在籍のためには、毎年保護者の署名が必要である。協議には教員、ペダゴグ(Pædagog)、保護者、心理士、校長、必要な場合は言語聴覚士が参加する。個人の資料は校長、保護者、自治体が保管する、とのことであった。

「就学時の引継ぎの制度や仕組みについて」は担任教員から以下の回答を得た。子どもが就学前教育機関の最終年の時に、子どもの様子を次年度担当予定教職員が参観に行く。また引継ぎ資料も参考にすると、とのことであった。

(3) 特別学級の訪問調査考察

特別学級でも基礎教科は教員が指導し、実技教科はペダゴグ(Pædagog)が指導していた。授業内での個別支援は、教員とペダゴグ(Pædagog)双方が行っていた。子どもの気持ちを落ち着かせる場面ではペダゴグ(Pædagog)が頻繁に子どもにかかわっていたことや大学のペダゴグ(Pædagog)養成課程における履修内容から、子どもの感情を理解し、子どもと対話することがペダゴグ(Pædagog)の専門性の一部であると考察した。先行研究においても³⁾、ペダゴグ(Pædagog)と教員の協働による指導は、障害児の適切な教育支援についてチームで決定し、保護者との緊密な協力関係を育み、強化するのであり、デンマークの特別教育を特徴づけてきたと言及されている。ペダゴグ(Pædagog)は教員との相補的な協働指導者であるとともに、社会性指導や保護者と信頼関係の構築、そして子どもの全面的な発達を保障する専門職であると考察した。

IV. 総合考察

本稿では、デンマークのペダゴグ(Pædagog)の専門性と役割について国民学校の就学前学級、通常学級、特別学級において現地調査を行った。以下に本調査で明らかになったことを国民学校におけるペダゴグ(Pædagog)の専門性、ペダゴグ(Pædagog)と教員の差異、移行支援の観点から示す。

第一に、ペダゴグ(Pædagog)の専門性は、教員とともにチームで学級経営を行うことであ

る。先行研究においても¹²⁾、様々な分野の専門知識を有する指導者が、協働作業を行うことができればインクルーシブ教育の学級に最適なサービスが提供されることが指摘されている。複数の教職員がかかわることで子どもに対して早期に、集中的な個別の支援が可能になったとの指摘もある。他の先行研究¹³⁾でもペダゴグ(Pædagog)は学習科目で子どもを支援するだけでなく、社会的能力など多様な視点で子どもを支援することができる、と指摘されている。

第二に、ペダゴグ(Pædagog)と教員の差異については、基礎教科の指導に専門性を有する教員に対して、ペダゴグ(Pædagog)は実技科目や学級づくりとしての特別活動の授業を担当し、特別学級では社会性、ソーシャルスキルの指導をしていた。教員とは異なる観点から、子どもの発達や成長、心理面に焦点をあてた指導を行っていたと考察した。

第三に、移行支援に関しては、就学前教育機関終了から国民学校入学の移行期間に学童保育において子どもの実態把握を進め、学校入学後の学級編制を検討する役割を担っていた。就学前学級では学校生活に慣れることなど、就学準備活動を行っていた。就学後も国民学校の活動に参画しつつ、放課後には学童保育の指導を担うなど、授業中と放課後両方の子どもの姿を見ることができていた。また保護者との信頼関係形成においても重要な役割を担っていた。

これらのペダゴグ(Pædagog)の専門性や役割は、子どもの連続した成長や学びを意識した指導につながる。同時に特別な支援が必要な子どもの発達を学習指導と生活指導両側面から支えるためにも不可欠な存在であると考察した。

文 献

- 1) Böhm-Kasper, O., Dizinger, V., Gausing, P. (2016) : Multiprofessional Collaboration Between Teachers and Other Educational Staff at German All-day Schools as a Characteristic of Today's Professionalism, 29-51.
- 2) Danish Montessori Society (2015) : HISTORY MONTESSORI'S WAY TO DENMARK <http://montessorisociety.dk/> (2020.7.2 取得).
- 3) Friend, M., Cook, L., Hurley-Chamberlain, D., Shamberger, C. (2010) : Co-Teaching, An Illustration of the Complexity of Collaboration in Special Education. *Journal of Educational and Psychological Consultation*, 20(1), 9-27.

- 4) Hygum, E. (2014) : To be or not to be-the child as a humanbeing , In *Early Childhood Education Values and Practices in Denmark*, edited by Hygum, E., Pedersen, P. M, 11-19. Aarhus : VIA SYSTIME.
- 5) Jensen, J. J. (2018) : “Denmark - ECEC Workforce Profile .” In *Early Childhood Workforce Profiles in 30 Countries with Key Contextual Data*, edited by P. Oberhuemer and I. Schreyer. Munich. www.seeepro.eu/ISBN-publication.pdf, 262-285 (2020.7.26 取得).
- 6) Jensen, V. M., Skov, P. R., Kortlægning, E. T. (2018) : Lærere og pædagogers oplevelse af den længere og mere varierede skoledag i folkeskolereformens fjerde år, 54.
- 7) Ministry of Higher Education and Science (2019) : Bachelor in Social Education, <https://ufm.dk/en/education/higher-education/university-colleges/university-college-educations/bachelor-in-social-education> (2020.7.26 取得).
- 8) Pedersen, P. M. (2014) : From philanthropist to professional bachelor's degree, In *Early Childhood Education Values and Practices in Denmark*, edited by Hygum, E., Pedersen, P. M, 21-38. Aarhus : VIA SYSTIME.
- 9) 齋藤正典, トート・ガーボル (2010) : デンマークにおける乳幼児期のインクルーシブ教育・保育. 相模女子大学紀要, A 人文系, 74, 59-70.
- 10) Samuelsson, I. P., Carlsson, M. A. (2008) : The Playing Learning Child. Towards a pedagogy of early childhood, *Scandinavian Journal of Educational Research*, 52(6), 623-641.
- 11) Mehlbye, J. (2001) : *Folkeskolen år 2000 Evaluering af 8-punkts-programmet*, Undervisningsministeriets forlag.
- 12) Murawski, W. W., Lochner, W. (2011) : Observing Co-Teaching: What to Ask For, Look For, and Listen For, *Intervention in School and Clinic*, 46(3), 174-183.
- 13) The Ministry of Social Affairs in consultation with the Ministry of Education (2000) : *Early Childhood Education and Care Policy in Denmark-Background Report*.
- 14) 山浦祐香, 是永かな子 (2018) : デンマークの教員養成およびペダゴグに関する一考察. 高知大学学術研究報告, 67, 51-64.

(受稿 2020.1.11, 受理 2020.9.14)